

第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム 「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」全記録（Ⅱ） 〈パネルディスカッション〉

テーマ 「アジア研究の過去・現在・未来（そのⅡ）」

パネリスト 國分良成（慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長）

リチャード・ダイク（ハーバード大学アジアセンター顧問）

李廷江（清華大学日本研究センター所長、中央大学教授）

江藤名保子（学習院大学教授）

モデレーター 李春利・ICCS 所長

- ・一般討論&質疑応答
- ・総括 佐藤元彦（愛知大学大学院長）
- ・閉会の挨拶 鈴木孝昌（中日新聞社取締役・名古屋本社代表）



田中英式（愛知大学経営学部教授、総合司会）

それでは、これより第二部のパネルディスカッションに移りたいと思います。第二部のパネルディスカッションでは、李春利先生にモデレーターをご担当いただきますので、ご登壇者の紹介等は、李春利先生にお願いいたします。では李先生、お願いいたします。

李春利（愛知大学経済学部教授・ICCS 所長）

モデレーターを務めさせていただきます李春利と申します。第二部では、さきほどの記

念講演と基調講演の2人に加えて、まず、清華大学と中央大学両方の教授を務めていらっしゃる李廷江先生から、そして、「アジア研究の過去・現在・未来」ということで、現在と未来を中心に語っていただく学習院大学法学部教授の江藤名保子先生よりパネラースピーチを賜ります。

これまで日本人と、アメリカ人に語っていただきましたので、次は中国人の先生にお話しいただきたいと思います。皆さまのお手元にはプロフィールがありますので、ご参考いただければと思います。簡単にご紹介いたしますと、李廷江先生はヴォーゲル先生と40年来の古い友人で、中国におられた時からヴォーゲル先生との交流が始まりました。その後、日本に留学され、東京大学では戦後に、中国本土から来た中国人留学生として博士号第1号を取得された方です。これはだいぶ前の話ですが、私にとってもとても親切的な先輩です。ヴォーゲル先生との深い交流を踏まえて、「エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界」というテーマでご講演いただきます。

その後、江藤先生には、現代中国の政治外交というご専門のお立場を踏まえて、「日本における中国研究—展開と課題—」というテーマでご講演いただきます。江藤先生は、ご紹介するまでもなく、おそらく多くの方々がテレビやYouTubeなどでよく見ておられると思いますが一実は私もよく見ておりますが—いつも明快に分かりやすく現代中国について解説をしておられますので、今日も期待しております。

そして、お二方のパネラースピーチの後にパネルディスカッションを行う予定です

では、まず李廷江先生にパネラースピーチをお願いいたします。よろしくお願いいたします。

パネラースピーチ

「エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界 —個人史の視点を中心に—」（本誌参照）

李廷江

（清華大学日本研究センター所長・中央大学法学部教授）

李（春）：李廷江先生、ありがとうございます。「エズラ・ヴォーゲル（傅高義）先生の三つの世界」、オリジナルな資料に裏付けられたとても重厚なご講演でした。さすがヴォーゲル先生と40年間のご交流があり、いろいろ貴重な歴史的資料をご披露いただいて、大変参考になりました。

また、ヴォーゲル先生の最後のご著書『日中関係史—1500年の交流から読むアジアの未来—』—私はそれをヴォーゲル先生の人生の卒論と呼んでおりますが—に対する歴史的な事実関係や資料文献の確認について、李廷江先生が10人ぐらい日中関係史の専門家を集めて、その本の最終校正をサポートされたそうです。やはり長い歴史関係の研究書ですので、個別の事実の確認などは非常に重要な作業です。李廷江先生をはじめ、関係者たちは総力を挙げてサポートしてこられたと聞き及んでおります。

実は、李廷江先生は近代史のなかの日中関係史がご専門で、とりわけ近衛篤磨に関する研究は、主要な研究テーマの一つでした。『近衛篤磨と清末要人一近衛篤磨宛来簡集成一』¹という分厚いご著書を出版されました。時々、弊学の名古屋校舎や豊橋校舎にもお越しになり、資料を調べに来られたりしています。愛知大学・東亜同文書院大学とのご縁は、非常に深いわけです。

それでは次に、江藤先生にパネラースピーチをお願いいたします。よろしくお願いいたします。

パネラースピーチ

「日本における中国研究—展開と課題—」 (本誌参照)

江藤名保子
(学習院大学教授)

李(春) : 江藤先生、過去・現在・未来と、とてもかみ合ったディスカッションを展開していただき、ありがとうございます。

では、國分先生、さきほどのご講演の中でなにか補足することがありますでしょうか。

國分良成 (慶応義塾大学名誉教授、前防衛大学校長)

一つ目は、ヴォーゲル先生が日中の対話を促しましたし、米中もそうでした。最大の問題は、対話をしてどうするのかというところが一つの大きなテーマになっていると思います。なにをテーマにするのか、そして、それによってなにを実現するのか、対話というのは非常に言葉としては使いやすいのですが、一体、具体的になにを話してなにを目的にするのか。その時にお互いが同じ方向に向かって、物事を突き進めていこうと考えているかどうかということが重要なのです。

特に米中の問題—また、日中もそうですけれども—共通の方向に向けてなにかを解決しなければなりません。もちろん、さまざまな安全保障の課題などあるかもしれませんが、恐らくもっと前提の部分のところで議論が止まってしまっています。それは恐らく政治体制に関係している、と私は思っているのです。政治体制がお互いにやはり違うわけです。その部分のところは、変えようにももう変えようがないのです。

二つ目の質問は、質問というか問題点は、ヴォーゲル先生の時代は、その時代の産物なのです。もちろん、より客観的に言えば、ヴォーゲル先生が描いていた鄧小平の時代というのは、あの時代の中国なのです。そうでなくなった中国をどう考えるかというのは、ポスト・ヴォーゲル先生の問題なのです。だから、正直言って、ヴォーゲル先生の鄧小平の本を読めば、そのとき中国はまだ発展途上国の状態だったのです。中国は言うことを聞き、改革開放を進めているのです。それによって国際システムの中に入っていくという鄧

¹ 衛藤瀋吉監修、李廷江編著『近衛篤磨と清末要人一近衛篤磨宛来簡集成一』、原書房明治百年史叢書、2002年。

小平論を展開しているわけです。そこで何らかの形で支援してあげなければいけないという思いがあったと思います。ただ問題は、今の中国はそういう中国なのか、ということが今世界的な議論になっているわけです。

最終的に政治体制の問題だったら、もうそれ以上答えが出ないので、なにも言えません。しかし考えてみれば、日中国交正常化なり、その時代は体制の違いを乗り越えて、関係をどう維持するか、ということもできたわけです。そういうことからすると、体制を超えた形で、これから日中なり米中なりが関係を維持していけるかどうかということが課題になるのです。

多分、今の状況というのは、鄧小平時代の後期、天安門事件以後の時期とそれほど大きく変わっていない面があります。基本的には共産党の独裁を認めた形での改革開放なのです。しかし、そのスタイルが今の指導者、つまり習近平によってそこからさらに大きく変わってしまっています。

問題は、習近平を取り換えれば話はうまくいくのか、という議論になるわけです。実はそこには変わる部分と、変わらない部分があるだろうというふうに私は思っています。だから、ここはそれぞれの国の持っている一つの「生きざま」というのが中心にあるから、そこはなかなか難しいのです。多分、米中関係についても、アメリカは「やはり中国は変わる」と期待を持っていたのです。恐らく社会主義市場経済なりをやることによって、改革開放を進めることによって、中国がアメリカと同じような体制に変わっていくという前提にあったかと思えます。8年ぐらい前までは、アメリカはRIMPAC（リムパック、Rim of the Pacific Exercise、環太平洋合同演習）に中国を招待していました。2016年までは招待していたわけです。これはアメリカ型の軍事行動の取り方を、ほかの太平洋の諸国に教えるという訓練です。日本は、足元が危ないと、反対したわけです。ところが、アメリカはたぶん中国は変わると思っていました。考えてみたら、アフガニスタンも変わると思っていたし、イラクも変わると思っていたし、昔はベトナムも変わると思ったわけですがけれども、ある意味では、そこにアメリカは人の良さがあるわけです。

そのこの部分のところは日本はちょっと違っていました。日本はなにかというと、どうせ中国はあまり変わらない。でも、国際システムの中に中国を入れることによって、どうか中国が国際ルールを守ってくれるのではないかと、というのが日本の一般的な考え方だったと思うのです。だから、今ではアメリカのほうが圧倒的に中国にきついです。なぜかというと、完全に裏切られたと思っているわけです。

アメリカは同じようなことを経験しています。それは米ソの冷戦です。つまり、ソ連を変えられると思わなかったのが、米ソの対話が始まったわけです。だから、恐らく中国に対しても、徐々にアメリカは中国を変えることは無理だと思い始めていて、恐らく今後は少しずつ対話を進めようとしていくでしょう。米ソが対話に入ったのは、結局核兵器が、アメリカもソ連も同じレベルになったからでした。中国はまだ500発で、アメリカは5,000発ですから、差はまだ大きいのです。ただ、経済や金融などはお互いに破壊できる場所があるようにも思います。経済や金融でも相互確証破壊（mutually assured destruction, MAD）的な部分がありますから、そうしたところから対話が始まるかもしれません。

李（春）：ありがとうございます。今、アメリカは中国に対して期待しすぎて、その裏返しとして「中国バッシング」を、昔の「ジャパン・バッシング」（Japan bashing, 日本叩き）以上にやっているわけです。経済を武器化すると、その中で一番先端的なところは半導体です。中国語では「チャアポーズ（招脖子）」と言って、「首を締め上げる」という意味ですけれども、半導体は武器になっているのです。そのあたりについて、ダイク先生、アメリカはどこまでやれば気が済むのでしょうか。

リチャード・ダイク（Richard Dyck, ハーバード大学アジアセンター顧問）

今、國分先生がおっしゃったように、結局、アメリカはナイーブだったのです。さきほどアメリカは2008年か2009年あたりから中国に対して不信感を持ち始めたという話がありましたが、日本は2001年か2002年あたりから、中国を要注意としていました。2001年から2002年にかけて反日運動がかなり起きたのです。私の上海の家の近くには日本人がたくさん住んでいますが、反日運動の群衆が公使公邸まで押し寄せるといった争議がありました。

しかし、2008年から2009年にかけて、リーマンショックの後に、急劇に円高になりました。中国に対して日本からの設備投資が多くなり、投資額も急速に増えました。要注意でありながら、円高だから、中国で工場をつくったりしていましたが、でも、注意を払いながら慎重に進めていました。そうするなかで、例えば、JETROは大きな役割を果たしていました。

私は毎週のように、大抵木曜日に上海の米国商工会議所の友達と電話会議をしているけれども、この数年間、彼らはみんな憂鬱（ゆううつ）になっています。私はJETROの評価委員もやっていますが、中国に進出している日本の会社は、なにか問題がある時に、中国政府に直接持っていくのではなく、JETRO経由で中国の政府に持っていくのです。つまり、ワンクッションを置いているのです。しかし、アメリカの場合はそうではない。アメリカはこの数年間、中国との間でデカップリングがだいぶ進んでいます。日本は隣国なので、経済面のつながりが非常に強く、中国と共に暮らさなければならないということで、デカップリングができないのです。でも、注意を払いながら暮らすのが日本的なやり方だと私は思います。

李（春）：少し前後しますが、実は私はパネルディスカッション・ポイントを、スライドを3枚ぐらいご用意しましたが、実際のところ、話はだいぶ先へ進んでおります。先生方にはさまざまな角度から語っていただきまして、とても示唆深いものが多く、大変参考になりました。そこで、これらのスライドを活かしながら、自分の意見を申し上げ、私なりのまとめと感想を述べさせていただきたいと思います。

今日、我々は部分的ではありますが、エズラ・ヴォーゲル先生の、「エズラ・ヴォーゲルアジア学」—これは國分先生が提起された興味深いコンセプトですが—を振り返ってまいりました。ヴォーゲル先生が1958年から2020年に亡くなられるまで60年間の長きにわたり、激動のアジアの成長と変化を見守り続けてこられました。この間、日本はどれだけ変わったのか、また、日本モデルは東アジアにどのように伝播・拡散していったのか。

それからいわゆる「アジア四小龍」の台頭と勃興、さらには中国の改革開放と高度成長といったように、東アジアではダイナミックな変化が続いておりました。とりわけアメリカでは、ヴォーゲル先生ほど一貫してフレンドリーな目線でアジアの成長と変化を見守り続けてきた研究者はそれほど多くないのではないかと思います。

それを踏まえて、今現在の諸問題を考える際に、「エズラ・ヴォーゲルアジア学」から我々がどんな示唆を得ることができるのか。今日にとってなにが参考になるのでしょうか。ご覧のように、ダイク先生は2021年の文章で、ヴォーゲル先生の研究方法についてとても興味深いご指摘がありました。すなわち、

「ヴォーゲルは、ハーバード大学の経済学、政治学、社会学、人類学といった学問分野に地域研究を取り入れるよう、常に闘ってきた。彼の主張は、理論を証明するために“地域”があるのではなく、“地域”を理解するために理論があるべきだということだ。」

2

パネルディスカッション・ポイント(1)

李 春利

1.「アジア研究の過去・現在・未来」：今後のアジア研究ならびに社会科学研究の方法論について

— (Richard Dyck) Vogel always fought to have area studies represented in the disciplines such as economics, political science, sociology, and anthropology at Harvard University. His point was that theory should be in the service of understanding the “area”, rather than the “area” in the service of proving theory. (Richard Dyck, Ezra Vogel: 1930–2020, East Asia Forum, Asian voice, January 12, 2021)

— (和訳) ヴォーゲルは、ハーバード大学の経済学、政治学、社会学、人類学といった学問分野に地域研究を取り入れるよう、常に闘ってきた。彼の主張は、理論を証明するために「地域」があるのではなく、「地域」を理解するために理論があるべきだということだ。(リチャード・ダイク、2021)

1

さらに、國分先生が指摘されたように、鄧小平の時代はもう終わりました。ヴォーゲル先生の時代も終わっているのではないかと。それから、中国も変わってきているので、これからはどうするのだという鋭い問題提起は、深く考えさせられるものがあります。私なりの理解では、まさに昨今の世界は不確実性がますます高まっているというのが、我々の今現在の立ち位置です。

² Richard Dyck, “Ezra Vogel: 1930–2020”, East Asia Forum, Asian voice, January 12, 2021.

パネルディスカッション・ポイント(1)

李 春利

- (國分良成先生) 現代中国研究の現状と課題：「ヴォーゲル・アジア学」からの啓示
・地域研究と理論（比較）研究 ・地域研究：言語、資料重視、フィールドワーク・・・
・現在、米国は地域研究軽視・理論重視、日本は実証研究最優先だが・・・
- (李廷江先生) エズラ・ヴォーゲル先生と彼の3つの世界：歴史・現実・未来
⇒ アクセントはどちらにつく？
- (江藤名保子先生) 2000～2010年代：マルチアーカイブズや計量的分析が増加傾向。
最近のシンクタンクの動向。
- 今後のアジア研究や社会科学の方法論のあり方について、どのようにお考えおられるか。

2

これまで繰り返し出てきた経済安全保障、そして安全保障、日中関係、米中関係はこれからどうなっていくのでしょうか。そこで、2番目のディスカッション・ポイントの中で、注目すべきはまさに半導体産業です。

その中で1つ目のポイントは、半導体産業は多分、経済安全保障を語るうえでの象徴的な産業になっていくだろうということです。いわゆる“Chip 4”というのが結成され、すなわち、米日韓台が対中半導体輸出規制の連盟を結成した国際的な連合体のことです。さきほどダイク先生が指摘されたように、日本は、半導体材料の分野では世界シェアの6割を占めており、半導体装置でも世界シェアの4割を占めています。これらの分野においては、日本は対中規制を強化しています。

パネルディスカッション・ポイント(2)

李 春利

2. 経済安全保障、そして安全保障、日中関係・米中関係について。

- 1)半導体産業はたぶん**経済安全保障の象徴的な産業**になっていると思います。いわゆる「Chip4」（米日韓台）は、**対中規制の連盟を組む**、**日本は半導体材料（世界シェア60%）と半導体装置（世界シェア40%）**について**対中規制を強化**しています。
- 2)米中対立はたぶん**長期化**すると思いますが、その中で日中関係、特に**経済安全保障、そして安全保障**を含めて、**このままでいいのか**。米中対立が日中関係に与える**影響**、**日本の立ち位置と今後の展望**について、どのように考えておられるか。

3

2 番目のポイントも非常に重要なものです。米中対立はたぶん長期化すると思いますが、アメリカ大統領選挙が終わっても、対中政策はたぶんあまり変わらないのではないのでしょうか。その中での日中関係、とりわけ経済安全保障、それから安全保障を含めて、このままでいいかどうか、ということを変更して考える必要があると思います。

私の理解では、別に「米中関係あつての日中関係」という構図ではないはずです。ヴォーゲル先生の最後のご著書の日本語版は、『日中関係史—1500年の交流から読むアジアの未来—』³というタイトルになっています。日本と中国の間は1500年に及ぶ長い交流の歴史があります。世界史的に見ても、このような長い付き合いはそれほど多くはありません。アメリカは建国してからまだ二百数十年で、特に日米安保は戦後の話ですので、まだ70年しか経っていません。したがって、米中対立が今後の日中関係に与えるさまざまな影響、日本自身の立ち位置、それから今後の展開と各種のシナリオについて、今こそ真剣に考えなければならない時期に来ているのではないかと思います。

まとまらないまとめとなりましたが、パネルディスカッションはいったんここで締めさせていただきます。この後は佐藤先生の総括、そして共催者の中日新聞社の鈴木さまの閉会のあいさつになります。長時間にわたりご清聴いただき、誠にありがとうございました。

田中：では続きまして、愛知大学経済学部教授で長く本学理事長・学長を務められました佐藤元彦先生に本日のフォーラムを総括していただきたいと思います。佐藤先生、よろしくお願いたします。

総括

佐藤元彦（愛知大学大学院長）



³ Ezra F. Vogel, *China and Japan: Facing History*, Harvard University Press, 2019. 日本語訳：エズラ・F・ヴォーゲル『日中関係史—1500年の交流から読むアジアの未来—』、益尾知佐子訳、日本経済新聞出版社、2019年。

今日は、お昼過ぎから現在までの長い間、皆さんお疲れさまでした。議論自体は多岐にわたっておりまして、非常に有意義な時間を過ごせたと思っておりますけれども、昨年実施した第1回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」との関係で若干コメントを述べまして、総括に代えさせていただければと思います。ちなみに、私も ICCS の運営委員であります。

一つは、方法論をどう考えるかという話であります。本日も言及あるいは紹介がありましたが、計量的な手法についてです。もっとも計量的な手法といっても、例えば、かつての日本でも「計量政治学」という分野がありましたけれども、その時代とは違って、ビッグデータとか AI が活用できる時代において、計量的な手法というのを地域研究にどう使うのかということが、今年のフォーラムでも話題になりました。結論としてはうまくまとまる形ではなかったのですが、それに関連した議論が、本日、複数の先生方から提起をされたということで、主催者側としては、この点は引き続き課題として受け止めていきたいと考えております。議論の中で、アメリカ的な方法であるとか、日本の伝統的な方法についても言及がありましたけれども、それらを振り返りながら、同時に未来に向けてどう考えていくのか、ということの一つの課題として受け止めたいと思います。

それからもう一つは、今の点にも関連するのですが、ウォーゲル先生の学問に対する姿勢、あるいは方法論をどう受け止めていくのか、ということでもあります。その意味でいきますと、國分先生が冒頭にお話しになった現在の研究の実態としては、「タコ壺」になっている、架け橋のような役割を果たす人、あるいはそういう体制が必要である、ということも非常に重要な指摘であったと思います。それから李春利先生から、ヴォーゲル先生の人となりとの関係において、研究の方法や対象に向かっていく姿勢についても、いろいろとご示唆をいただいたのではないかと思います。

私の印象としては、やはり対象に対して「丸ごと」ぶつかっていったというのが、ヴォーゲル先生ではなかったのでしょうか。そのうえで、どのように対象に的確に接近をしていく、あるいは対象を分析していくのか、またどういう方法があるのかということ、そこから考えていったのではなかろうか、ということ想像いたします。

ヴォーゲル先生のいろいろなご著書を見て、「著者紹介」という欄を見ますと、社会学者であるというような記載がわりと多いというふうに思いますけれども、その点でいくと、社会学者にとどまらず、経済学者であり、政治学者であり、あるいは人類学者であるというのがヴォーゲル先生ではなかったのかというふうに思います。その意味では、「丸ごと学」といいますか、あまりうまい表現が思いつかないのですが、そういう「丸ごと学」を極めていくというのが非常に重要ではないでしょうか。「タコ壺」との関係でいえば、なかなかそういうことができる人物というのはいないと思います。とはいえ、そこまでいかなくとも、自分が進めていることがどういう意味で全体の中に位置付けられているのかということ、それを絶えず意識する、そういう姿勢が多分重要になってくるのではないかと思います。

今日、特に李廷江先生からまとめていただいた、人となりと関連付けた学問に対する姿勢というのを学ぶことができたのも、とても参考になったと思います。

それから、李春利先生のほうから、このフォーラムの位置付けということについて説明

をいただきました。併せて、来年も予定しています、というお話が最後にあったかと思えます。来年は、「ヴォーゲル・ファミリー」というふうに我々は呼んでいるのですけれども、奥さまと、それからご子息、スティーヴン・ヴォーゲル先生のお二人をお招きして、同様に第3回「エズラ・ヴォーゲル記念フォーラム」を開催したいと思っております。

実はスティーヴン・ヴォーゲル先生がたくさんの研究業績を残されているわけですが、個人的に一番注目しているのは、「マーケットクラフト」(marketcraft)という概念です。「ステイトクラフト」(statecraft)という概念は皆さんよくご存じだと思いますし、どういう意味かを改めて説明するまでもないのですが、「マーケットクラフト」というのは非常に斬新であると同時に、もしかしたら、これからの世界経済、あるいは国際政治経済を分析していくうえで「鍵」となる概念ではないだろうか、というふうに思っています。

中国の経済について、社会主義市場経済という公式見解があるわけではありますが、むしろ市場経済という観点からどういうふうに見ていくのか、という見方は非常に興味深いと思います。あるいは、日本の市場経済とアメリカの市場経済は当然違うわけですが、さらにそれらと中国はどう違うのか、その違いをどういうふうに認識し、どうしたら市場経済をより機能的に動かしていくのか、そのような議論もできたらいいのではないかと、思っております。この分野は必ずしも私の専門ではないのですが、今日も「対立と競争」という表現が出ていましたけれども、要するに、対立の中身、あるいは競争の中身をもう少し詰めていった議論が恐らくこれからは必要になってくるのではないかと思います。対立は異質、相反、競争は同質、あるいは類似を連想させますが、一体どちらなのか。この意味において、「マーケットクラフト」というのは一つのキー概念になるのではないかな、と個人的に考えている次第です。

いずれにしても、今日の基調講演あるいは記念講演をいただいた先生方、あるいはパネルディスカッションにご登壇いただいた皆さま、さらにはこの会場にて、またオンラインで多数参加いただいた聴衆の皆さまに、改めて感謝を申し上げるとともに、これから最後のごあいさつを頂く、中日新聞社の鈴木さまをはじめとする関係者の皆さまにも心から御礼を申し上げて、簡単ではありますが、私の総括とさせていただきます。本日は、本当にご苦労さまでした。そして、ありがとうございました。

田中：では、最後となりましたが、今回のフォーラムに共催のご協力を賜りました、中日新聞社さまの取締役名古屋本社代表の鈴木孝昌さまより、閉会のごあいさつを賜ります。鈴木さまは、香港支局長、中国総局長をご歴任され、中国政治経済に大変深いご造詣をお持ちでおられます。では鈴木さま、よろしく願いいたします。

閉会の挨拶

鈴木孝昌（中日新聞社取締役・名古屋本社代表）



ご紹介いただきました中日新聞社の鈴木でございます。今日は本当に暑い中、大勢お集まりいただきまして、長い時間、聴講いただきありがとうございました。パネリストの先生方も貴重なお話を聞かせていただき、感謝を申し上げます。

今日のこのシンポジウムの前に、広瀬学長から聞いたお話でちょっとびっくりいたしました。愛知大学といえば、中国研究、中国語教育において日本を代表する大学であるわけですが、その愛知大学において中国語を学ぶ学生よりも、韓国語を学ぶ学生のほうが多くなってしまったそうです。これが現在の日中関係を象徴的に表しているというふうに思います。私の周りでも、若い人たちが中国に対して好きとか嫌いとかという議論ではなくて、関心がない、関心を示していない、というのを非常に強く感じます。私どもの新聞社においても、かつては中国に取材に行く、中国の特派員をやるというのは、花形の時代もあったわけですが、今は中国に行きたいという人はほとんどいません。それぐらい関心が失われています。そういう時代になっているということは、残念でなりません。

ヴォーゲル先生の研究スタイルでありましたフィールドワークと、徹底した当事者へのインタビューですが、そういうものを通じて対話をしたり交流をしたりして、それが両国間の関係を築いていくのだ、と教えられてきたと思います。ところが、國分先生が言われたように、そのやり方自体がもう通用しなくなっています。「ポスト・ヴォーゲル」という言葉も衝撃的でありましたけれども、鄧小平のことをやはり語らなくなっている、改革開放を語らなくなってきた中国というのは、私も非常に危機感を持って見えています。その鄧小平の弟子であった胡耀邦が、1980年代に日中関係において最も親密な時代をつくってくれたわけですが、そういう時代もまた過去のものになりつつあるのです。

日米中の三国関係ということを今議論されてきましたが、私が一番心配しているのはア

アメリカの変化です。アメリカがこの3か国の関係において一番変わってきているのではないのでしょうか。トランプの登場によって、アメリカ一国主義、アメリカ第一主義が台頭していく中で、台湾をもう守る必要はないじゃないか、あるいは台湾を守れない、といったような議論が公然と出てきています。ましてや、尖閣諸島をアメリカが血を流して守ってくれるのだろうか。北朝鮮の核問題にしても、アメリカが核戦争まで覚悟して朝鮮半島の平和に関与していくのかどうかということすら、危ういのではないか、というふうに思っております。

今、大統領選をやっていますけれども、これでトランプがまた勝利して、そういう方向にどんどん流れていってしまうのではないのでしょうか。心配されるのはウクライナです。トランプは恐らくウクライナから手を引く方向に動いていくのでしょうか。そうなると、アメリカは自由主義陣営の国を守れなかった、侵略された国を守れなかったという、重大な歴史的事実が残ることになります。そういうことを今後、同じことをしでかす国が現れるかもしれません。そういう前例をつくってしまうという大きな瀬戸際に、今世界は立っているのではないかと思います。アメリカは果たしてそれを認めるのか認めないのか、どこかで歯止めがかかるのかということ、注視して見ていかなければいけません。今、アメリカは多分ウクライナ、パレスチナとイスラエルの問題で手いっぱいになっていると思います。そこにさらに東アジアのことに手が回るのかどうか、そういう中で、今は非常に危険な状況を迎えているなというふうに思っております。

「ポスト・ヴォーゲル」になってしまっていて非常に残念なことではありますがけれども、ただ、今日、ヴォーゲル先生の薫陶を受けた日本と中国とアメリカの3か国の専門家の皆さんが、ここに一堂に会して真剣な話し合いをされた、というこの一点をもっても、ヴォーゲル先生の遺志は十分に受け継がれているし、ヴォーゲル先生の遺産は、十分に残されているというふうに実感しています。「死せる孔明、生ける仲達を走らす」という言葉がありますけれども、まさに「死せるヴォーゲル、生ける日米中を動かす」みたいな、そういうことになればいいかな、というふうに思っております。それを実践されている愛知大学にも改めて敬意を表して、閉会の言葉とさせていただきます。どうもありがとうございました。

田中：鈴木さま、どうもありがとうございました。

それでは皆さま、長時間にわたって聴講いただき、どうもありがとうございました。以上をもちまして、第2回エズラ・ヴォーゲル記念フォーラムをお開きとさせていただきます。最後に今日、ご登壇いただいた先生方に盛大な拍手で終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(監修：李春利 2024年12月20日 エズラ・F・ヴォーゲル先生5回忌の命日にて)